

日蓮大聖人御書全集

げんこうごしよ

減劫御書

新版
1966
〜
1969

減劫御書

けんじがんねん

まつ

どう

ねん

建治元年(75)末または同2年(76)

54歳または55歳

たかはしろくろうひようえ えんじや

高橋六郎兵衛の縁者

げんこう

もう

ひと

こころ

うち

そうろう

とん

じん

ち

さんどく

しだい

減劫と申すは人の心の内に候。貪・瞋・癡の三毒が次第

ごうじよう

成

しだい

ひと

命

縮

に強盛になりもてゆくほどに、次第に人のいのちもつづま

背

小

罷

り、せいもちいさくなりもてまかるなり。

かんど

にほんこく

ぶつぽういぜん

さんこう

ごてい

さんせいとう

げきよう

漢土・日本国は、仏法已前には三皇・五帝・三聖等の外経

たみ

こころ

調

世

おさ

しだい

をもつて民の心をととのえてよをば治めしほどに、次第に

ひと

こころ

善

果

無

悪

賢

人の心はよきことははかなく、わるきことはかしくくなり

しかば、げきよう外経の智ちあさきゆえに、あく悪のふかき失とがをいましめ

がたし。げきよう外経をもつて世よおさまらざりしゆえに、漸ようやく

ぶつきよう仏経をわたして世間をおさめしかば、よ世おだやか穩なりき。

これはひとえに、ぶつきよう仏教のかしこきによつて人民にんみんの心こころを

詳くわしくあかせるなり。

とうじ当時の外典げてんと申すは、もと本の外経げきようの心こころにはあらず。ぶつぽう仏法の

わたりし時は外経げきようと仏経ぶつきようとあらそいしかども、漸ようやく

外経げきようまけて王おうと民たみと用もちいざりしかば、げきよう外経げきようのもの、ないきよう内経ないきようの

所従しよじゆうとなりて、た立ちあうこと合なくありしほどに、げきよう外経げきようの

ひとびと ないきよう こころ 抜 ちえ 増 げきよう い そうろう

人々、内経の心をぬきて智慧をまし、外経に入れて候を、

愚 おう げてん 賢 思

おろかなる王は外典のかしこきかとおもう。

ひと こころ 漸 ぜん ちえ 果 無 あく ちえ

また、人の心ようやく善の智慧ははかなく悪の智慧

賢 ぶつきよう なか しょうじようきよう ちえ せけん

かしこくなりしかば、仏経の中にも小乗経の智慧、世間

治 よ とき だいじようきよう

をおさむるに、代おさまることなし。その時、大乘経を

弘 よ ちえ のち

ひろめて代をおさめしかば、すこし代おさまりぬ。その後、

だいじようきよう ちえ およ いちじようきよう ちえ 取 出

大乘経の智慧及ばざりしかば、一乗経の智慧をとりい

よ ちえ

だして代をおさめしかば、すこししばらくらく代おさまりぬ。

いま よ げきよう しょうじようきよう だいじようきよう いちじようほげきようとう

今の代は、外経も小乗経も大乘経も一乘法華経等

叶

世

故

しゆじよう

とん

も、かなわぬよとなれり。ゆえいかんとなれば、衆生の貪

じん ち こころ

賢

だいかくせそん だいぜん

瞋・癡の心のかしこきこと、大覚世尊の大善にかしこきが

たと

いぬ はな

ひと 過

ごとし。譬えば、犬は鼻のかしこきこと人にすぎたり。ま

はな きんじゆう

嗅

だいしよう びつう

劣

た鼻の禽獸をかぐことは、大聖の鼻通にもおとらず。

鼻

耳

鳶

まなこ

雀

ふくろうがみみのかしこき、とびの眼のかしこき、すずめ

した 軽

竜

み

みな

ひと

の舌のかるき、りゆうの身のかしこき、皆かしこき人にも

勝

そうろう

まつだいじよくせ

こころ

とんよく

しんに

すぐれて候。そのように、末代濁世の心の貪欲・瞋恚・

ぐち

けんじん

しようにん

おき

愚癡のかしこきは、いかなる賢人・聖人も治めがたきこと

なり。

ゆえ

とんよく

ほとけ

ふじようかん

くすり

じ

しんに

その故は、貪欲をば、仏、不浄観の薬をもつて治し、瞋恚

じ ひかん

じ

ぐち

じゆうにいんねんかん

をば慈悲観をもつて治し、愚癡をば十二因縁観をもつてこ

じ たも

ほうもん

説

ひと

落

そ治し給うに、いまはこの法門をといて、人をおとして、

とんよく

しんに

ぐち

増

貪欲・瞋恚・愚癡をますなり。

たと

ひ

みず

消

あく

ぜん

う

譬えば、火をば水をもつてけす。悪をば善をもつて打つ。

みず

い

ひ

みず

掛

しかるに、かえりて水より出でぬる火をば、水をかくれば、

油

たいか

あぶらになりていよいよ大火となるなり。

いま

まつだいあくせ

せけん

あく

しゅつせ

ほうもん

だいあく

今、末代悪世に、世間の悪より出世の法門につきて大悪

しゅつしよう

知

いま

ひとびとぜんこん

修

出生せり。これをばしらずして、今の人々善根をすすれ

よ 滅

しゅつたい

いま よ

てんだい

ば、いよいよ代のほろぶること出来せり。今の代の天台・

しんごんとう

しよしゆう

そうとう

養

げ

ぜんこん

み

真言等の諸宗の僧等をやしなうは、外は善根とこそ見ゆれ

うち

じゆうあくごぎやく

過

だいかく

ども、内は十悪五逆にもすぎたる大悪なり。

よ

治

だいかくせそん

ちえ

しかれば、代のおさまらんことは、大覚世尊の智慧のご

ちじんよ

あ

せんよこくおう

けんおう

寄

とくなる智人世に有つて、仙予国王のごとくなる賢王とよ

合

いつこう

ぜんこん

止

だいかく

はつしゆう

ちじん

りあいて、一向に善根をとどめ、大悪をもつて、八宗の智人

思

者

責

流

とおもうものを、あるいはせめ、あるいはながし、あるい

施

止

こうべ

剋

よ

少

治

はせをとどめ、あるいは頭をはねてこそ、代はすこしおさ

そつり

まるべきにて候え。

ほけきよう だいいち まき しょほうじつそう ないし ほとけ ほとけ
法華經の第一の巻の「諸法実相」乃至「ただ仏と仏と

のみ、いまし能く究尽したまえり」ととかれて候はこれ
よ くじん 説 そうろう

なり。「本末究竟」と申すは、「本」とは悪のね善の根、「末」
ほんまつくきよう もう ほん あく 根ぜん ね まつ

と申すは悪のおわり善の終わりぞかし。善悪の根本枝葉を
もう あく 終 ぜん お ぜんあく こんぽんししよう

さとり極めたるを仏とは申すなり。
覚 きわ ほとけ もう

てんだい い そ いっしん じつぼうかい ぐ とううんぬん しょうあん
天台云わく「夫れ、一心に十法界を具す」等云々。章安

云わく「仏これをもつて大事となす。何ぞ解し易きことを
い ほとけ だいじ なん げ やす

得べけんや」。妙楽云わく「乃ちこれ終窮究竟の極説なり」
う みようらくい すなわ しゅうぐくきよう ごくせつ

とううんぬん ほけきよう い みなじつそう あいはい とううんぬん てんだい
等云々。法華經に云わく「皆実相と相違背せず」等云々。天台

これを承けて云わく「一切世間の治生産業は、皆実相と相違背せず」等云々。

智者とは、世間の法より外に仏法を行わず。世間の治世

の法を能く能く心えて候を、智者とは申すなり。

殷の代の濁って民のわずらいしを、太公望出世して殷の

紂が頸を切つて民のなげきをやめ、二世王が民の口になが

かりし、張良出でて代をおさめ民の口をあまくせし、こ

れらは、仏法已前なれども、教主釈尊の御使いとして民を

たすけしなり。外経の人々はしらざりしかども、彼らの

ひとびと ちえ ないしん ぶつぼう ちえ 差 挟
人々の智慧は、内心には仏法の智慧をさしはさみたりしな
り。

いま よ しょうか おおじしん ぶんえい だい 慧 星 とき ちえ
今の代には、正嘉の大地震、文永の大せいせいの時、智慧
賢 こくしゆ にちれん もち
かしこき国主あらましかば、日蓮をば用いつべかりしなり。

ぶんえいくねん 同士打 じゆういちねん もうこ
それこそなからめ、文永九年のどしうち、十一年の蒙古の

攻 とぎ しゆう ぶんおう たいこうぼう 迎 いん
せめの時は、周の文王の太公望をむかえしがごとく、殷の

こうていおう ふえつ しちり しょう
高丁王の傳説を七里より請ぜしがごとくすべかりしぞか

にちがつ しょうもう たから けんじん ぐおう 憎
し。日月は生盲の財にあらず。賢人をば愚王のにくむと

繁 故 記 ほけきよう みこころ もう
は、これなり。しげきゆえにしるさず。法華経の御心と申す

は、これてい体のことにて候そうろう。外ほかのこととおぼすべからず思。

大悪だいあくは大善だいぜんの来るべき瑞相きたなりずいそう。一閻浮提いちえんぶだいうちみだす打な乱

らば、えんぶだいない「閻浮提内こうりようるふ、えんぶだい広令流布うち（閻浮提の内に、ひろ広く流布せるふ

しむ）は、うたがよも疑そうらい候わじ。

この大進阿闍梨だいしんのあじやりを故六郎入道殿ころくろうにゆうどうどのの御おんはかへつかわし遣

候そうろう。むかし昔この法門ほうもんを聞いて候き人々そうろうひとびとには、かんとう関東の内うちな

らば、われ我とゆきて行そのはかに自我偈墓よみ候じがげわんと存そうらじてぞん

候そうろう。しかれども、とうじ当時のありさまは、にちれん日蓮有かしこへゆく行

ならば、ひその日に一国いつこくにきこえ、鎌倉またかまくらまで騒もさわぎ

そらうひ

ハハハ

ひと

行

ひと

候わんか。心ざしある人なりとも、ゆきたらんところの人、

ひと目

恐

訪

そらう

しようりよう

人めをおそれぬべし。いままでとぶらい候わねば、聖霊

恋

有様

いかにこいしくおわすらんとおもえば、あるようもありな

でし

遣

おん墓

じがげ

読

ん。そのほど、まず弟子をつかわして、御はかに自我偈をよ

よし

おんこころ得そらう

きようきようきんげん

ませまいらせしなり。その由、御心え候え。恐々謹言。